専修人文論集98号
405-420，2016

≪研究ノート≫

# 足利本仮名書き法華経の異体仮名

## ―ハの異体仮名の書記傾向―

斎　藤　達　哉*

## はじめに

本稿は，鎌倉時代末期写の「足利本仮名書き法華経」（以下，足利本と記す）について，仮名表記資料としての性格を探索するための研究ノートとして，幾つかのデータを報告するものである。

第１章では，足利本を含む仮名書き法華経資料群の「表記」についての研究状況を概観する。

第２章では，足利本のハの異体仮名の書記傾向について，次の３点からのデータを整理・報告する。

１．ハの異体仮名の比率は，軸によってどのようになっているのか

２．ハの異体仮名の選択は，前後の文字の字形と関係があるのか

３．ハの異体仮名の連綿率は，どのようになっているのか

＊専修大学文学部教授

# 1．文字史資料としての足利本仮名書き法華経

## 1.1. 研究史の概略

仮名書き法華経資料群は，中田祝夫らによって1970年代に足利本の影印・翻字・索引(注1)が，1980年代後半に妙一本の影印・翻字・索引が整備・公刊されたことにより広く研究がなされるようになった。2006年には野沢勝夫(注2)によって資料研究が再整理されて現在に至る。

足利本を資料とした日本語学研究は，林（1977）によるハの異体仮名の研究，石井（1979，1980，1981）による字音の整理，峰岸（1979）による漢字表記と文体の研究，柏谷嘉弘（1988）による漢語の整理，柏谷直樹（1989）による表記と訓法の研究などが行われてきた。漢字で書かれるはずの字音語までを仮名表記している資料であるから，漢語の仮名表記に研究が集中しがちであった。

## 1.2. ハの異体仮名に関する研究

漢語の仮名表記に焦点を絞った研究が多い中で，林（1977）は異体仮名字母の使用の実態解明に取組んだ研究として注目される。

林論文は，仮名「は」「八」「者」「半」「盤」（以下「ハの異体仮名」と呼ぶ）について，表記された語の種類（字音語の自立語，和語の自立語，助詞）ごとに使用傾向を整理している。同論文の記述中から，整理・抜粋すると，おおよそ次のようになる（(a)〜(d)は稿者が私に付加）。

(a)　仮名「者」……自立語の表記に用いられる傾向がある

(b)　仮名「八」……助詞の表記にも，自立語の表記にも用いられる

(c)　仮名「は」……助詞の表記専用

(d)　仮名「盤」「半」……少数ながら，助詞の表記専用

林論文は，上記の状態を「これまで見てきたような用字原理によってか

なり意識的に使い分けられている[注3]」（116ページ）と見たうえで，この使い分けによって誤読・誤認の防止という効果が期待できたと説明づけた。つまり，ハの異体仮名を「語の識別的機能を荷うのにふさわしい特徴を備えた仮名」（95ページ）と捉えたのである。

実際には，足利本の用字には，上記(a)〜(d)から外れるものも見られる。用字上の不統一があることについて，林論文では，足利本全８軸における軸ごとのハの異体仮名の使用率の差に着目し，「原本[注4]以前のある段階に複数の人物による分担書記があって用字上の不統一をもたらし，それがさほどの改変を受けずに原本まで温存された」（122ページ）と推定する。語の認定に有効に働く用字原理が普遍的に存在し，そこに分担書記者各自の書きぐせが混在した結果，「たまたま特異なかたよりを示すだけの結果となって現われている」（122ページ）という見解を示す。

## ２．ハの異体仮名の書記傾向差について

林（1977）では，ハの異体仮名の使用傾向差を，原本（足利本の前段階の資料）から存在した普遍的な用字原理と捉え，傾向差から外れるものや特定の軸での使用の偏りを原本の分担書記者各自の書きぐせと考えている。以下では，ハの異体仮名について新たにデータを整理・報告し，再考するための材料としたい。

### 2.1. ハの異体仮名の比率は軸によってどのようになっているのか

林（1977）では，特定の軸での使用の偏りを分担書記者各自の書きぐせと考えている。では，ハの異体仮名の比率は軸によってどのようになっているのだろうか。

表１は，足利本の各軸それぞれの場合と全８軸をまとめて見た場合との，

**表１　軸ごとのハの異体仮名の頻度**

| | 第一軸 | 第二軸 | 第三軸 | 第四軸 | 第五軸 | 第六軸 | 第七軸 | 第八軸 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 仮名「は」 | 106 | 85 | 55 | 55 | 145 | 133 | 66 | 123 | 768 |
| 仮名「者」 | 251 | 277 | 290 | 286 | 297 | 164 | 154 | 262 | 1981 |
| 仮名「八」 | 165 | 226 | 173 | 96 | 48 | 40 | 69 | 125 | 942 |
| 仮名「半」 | 0 | 4 | 4 | 0 | 1 | 0 | 3 | 5 | 17 |
| 仮名「盤」 | 10 | 8 | 9 | 3 | 2 | 1 | 1 | 0 | 34 |
| 全　体 | 532 | 600 | 531 | 440 | 493 | 338 | 293 | 515 | 3742 |

ハの異体仮名の頻度を示したもので，図１はそれに基づいた割合を棒グラフで示したものである。

図１で俯瞰的にみると，傾向を左右するのは，仮名「は」と「八」の比率であり，全８軸は大きく次の３グループに分かれる。

Ⅰ．仮名「八」が，仮名「は」を上回る軸（第１～４軸）

Ⅱ．仮名「は」が，仮名「八」を上回る軸（第５・６軸）

Ⅲ．仮名「八」と仮名「は」がほぼ同じ割合の軸（第８・９軸）

足利本は，筆跡を見ると同一書記者によるものであるが，原本での分担書記者を想定するならば，少なくとも三つのグループが考えられることが分かる。

### 2.2. ハの異体仮名の選択は，前後の文字の字形と関係があるのか

矢田（2002）は，「定家の書記における異体仮名使い分け」という文脈の中でではあるが，異体仮名の使い分けが発生するモデルを示す。そこでは，「書記者甲」→「読解者乙」→「書記者乙」の３段階が設定される。

読解者乙における「異体仮名を位置によって使い分けよ」という規範は，「異体仮名の出現位置に一定の傾向がある」という現象の認識によって導かれたものであるとされる。

また，その前段階にある書記者甲は，異体仮名の使い分けに関する規範を持たないが，「字形から根元的に生ずる位置の偏り」と「二次的書記に

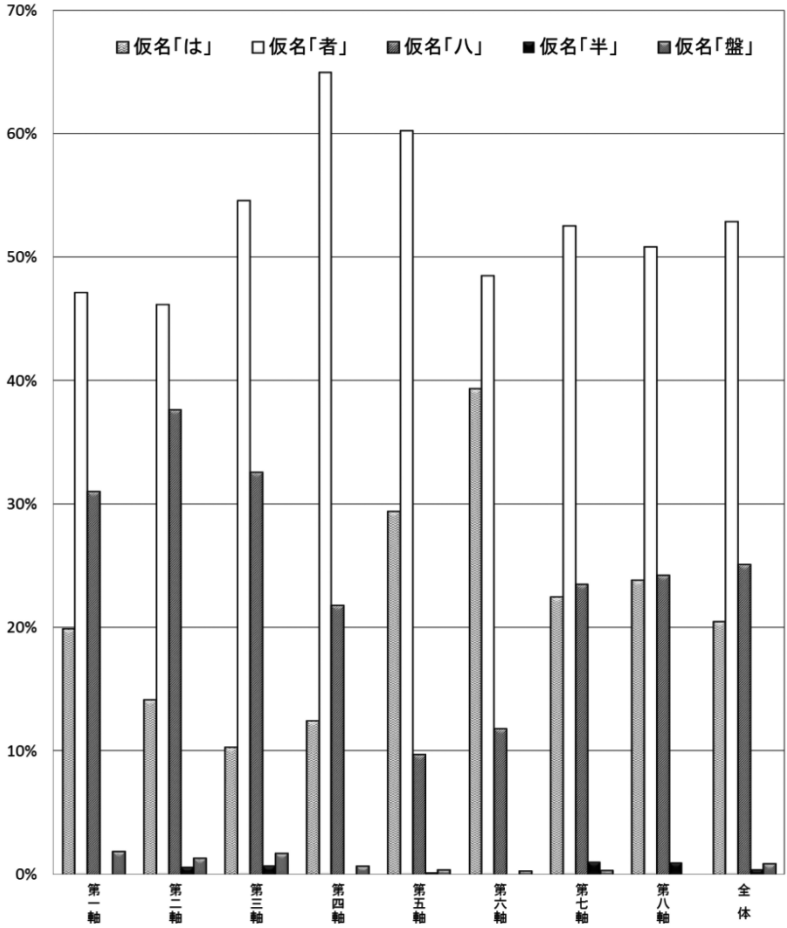


図１　軸ごとのハの異体仮名の割合

おける連綿の切れ目と分節位置の一致傾向」とによって生じる「出現位置の偏りの傾向」をもった書記を行っていたとされる（327～328ページ）。

多くの仮名資料は，『下官集』のような規範意識を意識化した傍証を持たない場合がほとんどで，解読者乙以降のモデルの設定は困難である。足利本もこの例に漏れないが，ここでは，「字形から根元的に生ずる位置の

偏り」がどの程度存在しているのかについて確認しておきたい。

矢田（2012）の「字形から根元的に生ずる位置の偏り」は，異体仮名に大き目に書くものと小さ目に書くものがあること，字形の複雑さ単純さ，縦長であるか横長であるか，起筆・終筆の位置などを総合的に表現したものであろう。

本稿では，便宜的に，ハの異体仮名がどのような文字と「共起」するのかという視点からの調査を行う。共起する仮名群を取出し，その仮名群に共通する字形の特徴を見ることができれば，「字形から根元的に生ずる位置の偏り」の一端が見られるはずであると考えるからである。

以下では，ハの異体仮名の表記に用いられる字母の選択が，「先行する文字の字形」または「後続する文字の字形」による影響を受けているか，いないかについて，因子分析を用いて整理・考察する。

### 2.2.1. 分析の手順

足利本のハの異体仮名５種（仮名「は」「八」「者」「半」「盤」）それぞれについて，先行する文字，後続する文字の粗頻度表を作成した。さらに，先行する文字，後続する文字それぞれについて，合計頻度順に上位50文字を選びケースとした(注５)。

因子分析は，Microsoft Excel のアドインソフトウェア「多変量解析システム Seagull-Stat」（早狩進氏開発）の因子分析マクロを用い，共通性の初期設定を「SMC（squared multiple correlation)」，回転の選択を「斜交回転（プロマックス法)」にして行った。なお，Seagull-Stat の因子抽出法は主因子法が採用されている。

### 2.2.2. 先行する文字との関係

ハの異体仮名に先行する文字の因子相関係数は，0.45であった。相関はやや弱いといった程度で，完全に異なる性質の因子が取り出せたとは言い

**表２　先行文字の因子パターン負荷量表**

| 変数名 | 因子１ | 因子２ |
|---|---|---|
| 半 | 0.96 | 0.05 |
| 盤 | 0.95 | −0.10 |
| 八 | −0.04 | 1.00 |
| 者 | −0.10 | 0.65 |
| は | 0.30 | 0.51 |

**表３　先行文字別因子得点**

| 因子１降順 | | 因子２降順 | |
|---|---|---|---|
| を | 4.48 | く | 4.95 |
| れ | 4.11 | な | 2.63 |
| 可 | 1.68 | を | 2.54 |
| せ | 1.47 | し | 1.51 |
| へ | 0.83 | ひ | 1.33 |
| ら | 0.61 | → | 1.03 |
| → | 0.57 | れ | 0.73 |
| な | 0.47 | ん | 0.34 |
| ひ | −0.16 | せ | 0.05 |
| え | −0.22 | 《尊》 | 0.05 |

切れない。

念のため因子パターンの負荷量（表２）を見ると，因子１は仮名「半」「盤」に強い負荷を及ぼし，因子２は「八」に強い負荷を及ぼしていることになる。先行する文字は２因子によって２群に分かれているが，この解釈については後述することにする。

次に，因子の意味傾向をより詳しく調べるために，ケースとした先行文字の因子得点を見たい。表３は，因子１，因子２それぞれについて，因子得点の高い先行文字を10文字ずつ抽出したものである。

表３では，上位10文字のうち「を」「れ」「せ」「→」(注６)「な」「ひ」の６文字が重複しており，二つの因子の意味傾向に差を見出すことはできない。

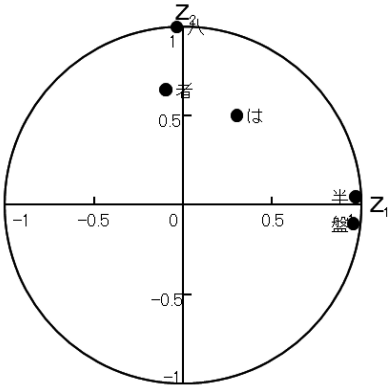


**図２　変数負荷量散布図**

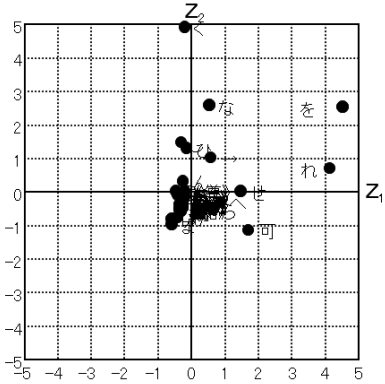


**図３　ケース因子得点散布図**

更に俯瞰的に観察するために，変数の因子パターン負荷量散布図とケースの因子得点散布図も併せ見たい。

散布図（図２，図３）からは，因子１（「半」／「盤」）は「れ」と関与し，因子２（「八」）は「く」と関与することが俯瞰できる。

実際の用例にあたってみると，文字列「れ半」「れ盤」は，「ミ(見)レバ」「漢語＋スレバ」「ナ(無)ケレバ」「ベケレバ」「ツレバ」「ヌレバ」という濁音の助詞の表記に当てられた仮名である。

文字列「く八」は，「ク(欽)ハ(喜)ンキ」「ク(親)ハ(見)ムケム」「ク(親)ハ(音)ンヲン」「ク(過)ハ(去)コ」「ク(華)エク(葉)ハ」「ク(光)ハ(明)ウミヤウ」「セイ(誓)グ(願)ハン」などの字音の表記や，「スナハチ」「ネ(願)ガハクハ」「ク(功)ドク(徳)ハ」などの清音（ハ行転呼音）に当てられた仮名である。

結果的には，ハの異体仮名の表記に用いられる字母は，先行する仮名の字形の影響を受けるのではなく，濁音かそれ以外の音かによって，「半」「盤」か「八」かに分かれる傾向が示唆されたと見た方がよい。「字形から根元的に生ずる位置の偏り」は，先行する文字との間には見出せなかったことになる。

2.2.3. 後続する文字との関係

ハの異体仮名に後続する文字の因子相関係数は，0.34であった。相関は弱く，おおむね異なる性質の因子が取り出せた。

因子パターンの負荷量（表４）を見ると，因子１は仮名「は」「盤」「半」に負荷を及ぼし，因子２は「者」「八」に強い負荷を及ぼしている。後続する文字は２因子によって２群に分かれているが，この解釈については後述することにする。

次に，因子の意味傾向をより詳しく調べるために，ケースとした先行文字の因子得点を見たい。表５は，因子１，因子２それぞれについて，因子得点の高い先行文字を10文字ずつ抽出したものである。

表５では，上位10文字のうち「←」(注７)「こ」「し」「い」の４文字が重

**表４　後続文字の因子パターン負荷量表**

| 変数名 | 因子１ | 因子２ |
|---|---|---|
| は | 0.92 | 0.03 |
| 盤 | 0.54 | −0.05 |
| 半 | 0.29 | −0.13 |
| 者 | −0.32 | 0.83 |
| 八 | 0.29 | 0.70 |

**表５　後続文字別因子得点**

| 因子１降順 | | 因子２降順 | |
|---|---|---|---|
| ← | 4.04 | ん | 2.67 |
| こ | 2.39 | ち | 2.51 |
| し | 2.33 | ← | 2.14 |
| す | 1.77 | し | 2.10 |
| い | 1.31 | う | 1.92 |
| 三 | 1.13 | く | 1.77 |
| 堂 | 0.66 | り | 1.30 |
| わ | 0.50 | こ | 0.66 |
| あ | 0.35 | な | 0.43 |
| 本 | 0.33 | い | 0.31 |

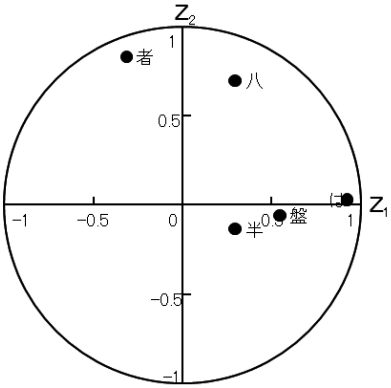


図４　変数負荷量散布図

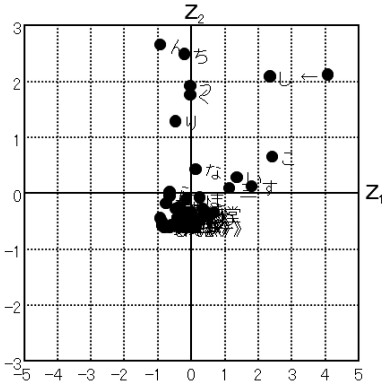


図５　ケース因子得点散布図

複しており，二つの因子の意味傾向に差を見出すことはできない。

更に俯瞰的に観察するために，変数の因子パターン負荷量散布図とケースの因子得点散布図も併せ見たい。

散布図（図４，図５）からは，因子１（「は」）は「こ」と関与し，因子２（「者」）は「く」「ち」と関与することが俯瞰できる。

実際の用例では，文字列「はこ」は，「ミレバ(見)コウシ(恒)ヤ(沙)ノ」「学セバ(恒)コウシ(沙)ヤノ」「…ヲバ(此)コノ」という濁音の助詞の表記や，「クハ(過)コ(去)」という字音の表記も見られるが，多くは「如来は，これ，諸法の王なり」（第３軸・８行目）のように「Aハ，コレ，Bナリ」の表現で用いられる。

文字列「者ん」は，「ネハ(涅)ン(槃)」「クハ(欲)ンキ(喜)」「クハ(観)ンス，クハ(観)ンジ（テ)」「セヒグハ(誓)ン(願)」などの字音の表記や，「タマハ(賜)ン」「イハ(曰)ン」「イハンヤ」「ネガハ(願)ン」「シノバ(忍)ン」など特定の語の表記にのみ用いられる。いずれも，法華経の本文の性格上，繰り返し出現する語である。

「者ち」は，ほとんどが頻出語「スナハチ」の表記に用いられている。

結果的には，ハの異体仮名の表記に用いられる字母は，後続する仮名の字形の影響を受けるのではなく，特定の語に固定して用いられがちという，

書記上の習慣に起因することが示唆されたと見た方がよい。「字形から根元的に生ずる位置の偏り」は，後続する文字との間においても見出せなかったことになる。

### 2.3. ハの異体仮名の連綿率はどのようになっているのか

仮名文では，連綿の持つ機能についても検討が必要である。連綿が語の分節と連動していることは広く知られている。

例えば，小松（2003）は，次のように述べる。

> 仮名には，墨継ぎと連綿とによる，事実上の分かち書きがなされており，語句の境界が容易に判別できる形になっていたはずである（20ページ）

矢田（2012）も，定家の書記に関しての言及であるが，「二次的書記における連綿の切れ目と分節位置の一致傾向」があるという慎重な捉え方ではあるが，連綿の切れ目が語の分節位置に重なりがちであることを指摘する。

足利本も二次的書記（原本を写した書写資料）であるから，連綿の切れ目と分節位置との連動の状況について検討する必要がある。以下では，ハの異体仮名それぞれの連綿率の差がどのようになっているのかを調査・整理し，その参考としたい。

足利本のハの異体仮名5種（仮名「は」「八」「者」「半」「盤」）それぞれについて，先行する文字との連綿の有無，後続する文字との連綿の有無を調査し，頻度および割合を示した表を作成した。

連綿の有無は，『足利本仮名書き法華経　影印篇』（勉誠社，1974年）の網掛けオフセットによる影印の当該箇所を目視して，「明らかに前後の文字のつながりが見えるか見えないか」で判断した。筆意の連画という考え方をすれば連綿が認められそうな事例であっても，影印篇でつながりが目視できない場合は，連綿していないと判断した。

**表 6　先行文字からの連綿**

| | 先行文字から連綿する | | 先行文字から連綿しない | | 行頭なので連綿はない | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | (頻度) | (%) | (頻度) | (%) | (頻度) | (%) |
| 半 | 0 | 0.0% | 16 | 94.1% | 1 | 5.9% |
| 盤 | 2 | 5.9% | 31 | 91.2% | 1 | 2.9% |
| 八 | 2 | 0.2% | 896 | 95.1% | 44 | 4.7% |
| 者 | 668 | 33.7% | 1196 | 60.4% | 117 | 5.9% |
| は | 214 | 27.9% | 533 | 69.4% | 21 | 2.7% |

**表 7　後続文字への連綿**

| | 後続文字に連綿する | | 後続文字に連綿しない | | 行末なので連綿はない | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | (頻度) | (%) | (頻度) | (%) | (頻度) | (%) |
| は | 2 | 0.3% | 693 | 90.2% | 73 | 9.5% |
| 盤 | 0 | 0.0% | 33 | 97.1% | 1 | 2.9% |
| 半 | 2 | 11.8% | 14 | 82.4% | 1 | 5.9% |
| 者 | 1300 | 65.6% | 621 | 31.3% | 60 | 3.0% |
| 八 | 348 | 36.9% | 506 | 53.7% | 88 | 9.3% |

表 6 は，先行する文字からの連綿について示したもので，ハの異体仮名を2.2.2. の表 2 の因子パターン負荷量表と同じ順番に配列した。

表 7 は，後続する文字への連綿について示したもので，ハの異体仮名を2.2.3. の表 4 の因子パターン負荷量表と同じ順番に配列した。

表 6 からは，先行する文字から仮名「半」「盤」「八」への連綿率は低く，仮名「は」「者」への連綿率は高いことが読み取れる。

このうち，仮名「は」「盤」「半」は助詞専用の傾向があるが，先行文字への連綿のし易さという点では，頻度の高い「は」と頻度の低い「盤」「半」の間で差が生じている。助詞専用の傾向のあるハの異体仮名についていえば，先行文字と連綿し易さについては，頻度の高さとの関連を見る必要があることが分かる。

表７からは，仮名「は」「盤」「半」から後続する文字への連綿率が低く，仮名「者」「八」の連綿率が高いことが読み取れる。後続文字への連綿率が低い「は」「盤」「半」は助詞の表記専用の傾向があり，連綿率の高い仮名「者」「八」は自立語の表記に用いられる傾向がある。後続文字へ連綿し易さについては，意味的単位での分節機能との関連を見る必要があることが分かる。

なお，連綿については，意味的単位と結び付かないことがあるという報告も行われている。

桝矢（2007）は，連綿を「記されざるものが読まれないよう制約する」（50ページ）ものと捉え，その範囲内であれば，「実質部と別の実質部を繋ぐものへと発達させられた」（49ページ）とし，意味的な単位をまたぐ連綿の発生を指摘する。また，堀川（2015）は，鎌倉時代の実用表記において，連綿が必ずしも意味的な単位と連動せず，特定の文字連続に生じること（固定的連綿）を指摘している。

足利本の連綿についても，こうしたことも踏まえ個々の用例を精査する必要がある。

## まとめ

以上，本稿では，鎌倉時代末期写の「足利本仮名書き法華経」について，仮名表記資料としての性格を探索するための研究ノートとして，以下３点を報告した。

1．ハの異体仮名の比率は軸によって異なり，原本での分担書記者を想定するならば，少なくとも三つのグループが考えられる。

2．ハの異体仮名の選択は，前後の文字の字形とは関係があるとは言えない。先行する文字との関係では濁音／非濁音によって選択さ

れる。また，後続する文字との関係では特定の語に固定した用字がなされることが影響する。

3．ハの異体仮名の連綿率には差がある。助詞専用の傾向の仮名では，先行文字との連綿し易さについて，頻度の高さとの関連を見る必要がある。また，後続文字への連綿のし易さについては，意味的単位での分節機能との関連を見る必要がある。

今後は，上記のことを手がかりとしながら，更に個別的な研究をすすめたい。

**注**

（注１）『足利本仮名書き法華経　影印篇』（勉誠社，1974年），『同　翻字篇』（勉誠社，1976年），『同　索引篇』（勉誠社，1977年）。『妙一記念館本仮名書き法華経　影印篇』（仏乃世界社，1988年），『同　翻字篇』（仏乃世界社，1989年），『同　索引篇』（仏乃世界社，1990年）

（注２）野沢勝夫『「仮名書き法華経」研究序説』（勉誠出版，2006年）

（注３）異体仮名使用の傾向差を「使い分け」と称することには，近年，慎重な見解が呈されている。例えば，今野（2009），矢田（2012）によって，次の指摘がなされている。林（1977）によって整理されたハの異体仮名の使用傾向についても，「意識的な使い分け」と見ることについては再考の余地が感じられる。

［今野（2009）］

「使い分け」とはある「区分」に選択肢を意図的に振り分けることを意味するのだから，「区分」が認識されていなければ「使い分け」とはいえない。したがって，そう主張するためには，中世期や近世期の異体仮名使用者がそうした認識をもっていたことを何らかの「手続き」によって証明しなければならない。しかし，すぐに予想ができるが，おそらくそうした「証明」はほとんど不可能にちかいはずである。（87ページ）

［矢田（2012）］

異体仮名の使い分けは，その分布を樹形図的に整理することができないという点において，はじめから「体系的でない」（306ページ）

異体仮名の使い分けは，もとより体系性をもつた規範ではなかったから，その社会化にあたって，不安定であり続けた（328ページ）

（注４）ここでの「原本」は，足利本仮名書き法華経のことを指す。

（注５）粗頻度表は次のページに掲げる。

（注６）「→」は，先行文字なし（行頭）であることを示す。

（注７）「←」は，後続文字なし（行末）であることを示す。

## 付表１　先行文字頻度表（上位51）

| 順位 | 先行文字 | は | 者 | 八 | 半 | 盤 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | く | 37 | 284 | 165 | 0 | 0 | 486 |
| 2 | な | 16 | 239 | 85 | 1 | 0 | 341 |
| 3 | を | 100 | 95 | 84 | 5 | 7 | 291 |
| 4 | し | 88 | 17 | 82 | 0 | 0 | 187 |
| 5 | → | 21 | 115 | 44 | 1 | 1 | 182 |
| 6 | ま | 1 | 164 | 4 | 0 | 0 | 169 |
| 7 | い | 4 | 143 | 7 | 0 | 0 | 154 |
| 8 | う | 37 | 75 | 33 | 0 | 0 | 145 |
| 9 | 可 | 9 | 97 | 1 | 2 | 6 | 115 |
| 10 | 尓 | 52 | 14 | 31 | 0 | 0 | 97 |
| 11 | ひ | 25 | 7 | 51 | 0 | 0 | 83 |
| 12 | あ | 1 | 71 | 0 | 0 | 0 | 72 |
| 13 | ら | 29 | 22 | 9 | 1 | 2 | 63 |
| 14 | ん | 17 | 18 | 26 | 0 | 0 | 61 |
| 15 | つ | 15 | 33 | 12 | 0 | 0 | 60 |
| 16 | の | 10 | 41 | 8 | 0 | 0 | 59 |
| 17 | れ | 13 | 2 | 28 | 4 | 10 | 57 |
| 18 | と | 12 | 37 | 7 | 0 | 0 | 56 |
| 19 | て | 16 | 20 | 17 | 0 | 0 | 53 |
| 19 | ね | 0 | 43 | 10 | 0 | 0 | 53 |
| 21 | や | 6 | 37 | 4 | 0 | 0 | 47 |
| 22 | 《人》 | 16 | 14 | 13 | 0 | 0 | 43 |
| 22 | え | 21 | 0 | 21 | 0 | 1 | 43 |
| 24 | せ | 32 | 1 | 1 | 2 | 1 | 37 |
| 25 | 《物》 | 13 | 15 | 8 | 0 | 0 | 36 |
| 26 | も | 1 | 30 | 2 | 0 | 0 | 33 |
| 27 | 多 | 3 | 21 | 6 | 0 | 0 | 30 |
| 28 | に | 6 | 9 | 13 | 0 | 0 | 28 |
| 28 | 能 | 2 | 25 | 1 | 0 | 0 | 28 |
| 30 | ち | 9 | 4 | 13 | 0 | 0 | 26 |
| 31 | お | 0 | 15 | 10 | 0 | 0 | 25 |
| 32 | き | 5 | 9 | 10 | 0 | 0 | 24 |
| 32 | 堂 | 1 | 22 | 1 | 0 | 0 | 24 |
| 34 | た | 0 | 19 | 4 | 0 | 0 | 23 |
| 35 | 《薩》 | 11 | 1 | 10 | 0 | 0 | 22 |
| 36 | 気 | 9 | 10 | 2 | 0 | 0 | 21 |
| 36 | ゆ | 12 | 5 | 4 | 0 | 0 | 21 |
| 38 | 《尊》 | 5 | 2 | 13 | 0 | 0 | 20 |
| 38 | 満 | 0 | 20 | 0 | 0 | 0 | 20 |
| 38 | ゑ | 10 | 8 | 2 | 0 | 0 | 20 |
| 41 | へ | 7 | 0 | 8 | 1 | 3 | 19 |
| 42 | 《来》 | 11 | 1 | 6 | 0 | 0 | 18 |
| 43 | 《法》 | 6 | 1 | 10 | 0 | 0 | 17 |
| 43 | こ | 4 | 12 | 1 | 0 | 0 | 17 |
| 45 | む | 3 | 5 | 7 | 0 | 0 | 15 |
| 45 | る | 2 | 12 | 1 | 0 | 0 | 15 |
| 47 | 《仏》 | 6 | 3 | 5 | 0 | 0 | 14 |
| 47 | 八 | 0 | 13 | 1 | 0 | 0 | 14 |
| 49 | 《給》 | 0 | 13 | 0 | 0 | 0 | 13 |
| 50 | 帝 | 1 | 8 | 3 | 0 | 0 | 12 |
| 50 | は | 0 | 11 | 1 | 0 | 0 | 12 |

## 付表２　後続文字頻度表（上位50）

| 順位 | 後続文字 | は | 者 | 八 | 半 | 盤 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ん | 0 | 281 | 60 | 0 | 0 | 341 |
| 2 | く | 22 | 296 | 10 | 0 | 0 | 328 |
| 3 | ち | 6 | 190 | 80 | 0 | 1 | 277 |
| 4 | ← | 73 | 60 | 88 | 1 | 1 | 223 |
| 5 | し | 44 | 86 | 85 | 0 | 2 | 217 |
| 6 | う | 8 | 132 | 72 | 0 | 1 | 213 |
| 7 | な | 18 | 109 | 15 | 2 | 0 | 144 |
| 8 | り | 0 | 60 | 69 | 0 | 0 | 129 |
| 9 | こ | 49 | 32 | 38 | 0 | 2 | 121 |
| 10 | い | 33 | 11 | 34 | 1 | 0 | 79 |
| 10 | せ | 5 | 67 | 7 | 0 | 0 | 79 |
| 12 | す | 35 | 9 | 28 | 0 | 5 | 77 |
| 13 | ら | 3 | 59 | 14 | 0 | 0 | 76 |
| 14 | ひ | 12 | 49 | 8 | 0 | 0 | 69 |
| 15 | 三 | 28 | 9 | 28 | 1 | 2 | 68 |
| 16 | た | 2 | 53 | 7 | 0 | 0 | 62 |
| 17 | む | 8 | 36 | 7 | 0 | 0 | 51 |
| 18 | さ | 6 | 30 | 10 | 1 | 0 | 47 |
| 18 | ま | 16 | 11 | 20 | 0 | 0 | 47 |
| 20 | 多 | 15 | 25 | 4 | 0 | 0 | 44 |
| 20 | つ | 9 | 27 | 8 | 0 | 0 | 44 |
| 22 | そ | 14 | 24 | 4 | 0 | 0 | 42 |
| 22 | を | 14 | 24 | 4 | 0 | 0 | 42 |
| 24 | あ | 18 | 9 | 12 | 0 | 1 | 40 |
| 25 | 堂 | 23 | 2 | 12 | 1 | 1 | 39 |
| 25 | わ | 21 | 1 | 14 | 3 | 0 | 39 |
| 27 | 須 | 0 | 38 | 0 | 0 | 0 | 38 |
| 28 | 可 | 8 | 27 | 2 | 0 | 0 | 37 |
| 29 | 本 | 18 | 5 | 8 | 0 | 1 | 32 |
| 30 | か | 13 | 7 | 6 | 2 | 2 | 30 |
| 31 | ゝ | 0 | 27 | 1 | 0 | 0 | 28 |
| 32 | と | 7 | 7 | 11 | 1 | 0 | 26 |
| 32 | ふ | 9 | 8 | 9 | 0 | 0 | 26 |
| 34 | 者 | 11 | 0 | 13 | 0 | 0 | 24 |
| 35 | き | 9 | 5 | 8 | 0 | 1 | 23 |
| 35 | 里 | 7 | 15 | 1 | 0 | 0 | 23 |
| 37 | 〈一〉 | 13 | 1 | 5 | 1 | 2 | 22 |
| 37 | 勢 | 0 | 22 | 0 | 0 | 0 | 22 |
| 37 | も | 7 | 3 | 11 | 1 | 0 | 22 |
| 40 | よ | 17 | 0 | 4 | 0 | 0 | 21 |
| 41 | れ | 0 | 19 | 1 | 0 | 0 | 20 |
| 42 | 志 | 11 | 3 | 3 | 0 | 2 | 19 |
| 43 | る | 1 | 17 | 0 | 0 | 0 | 18 |
| 44 | 《大》 | 9 | 1 | 6 | 0 | 1 | 17 |
| 45 | 気 | 7 | 2 | 6 | 0 | 0 | 15 |
| 46 | 《人》 | 6 | 0 | 8 | 0 | 0 | 14 |
| 46 | や | 2 | 9 | 2 | 0 | 1 | 14 |
| 48 | 《無》 | 9 | 0 | 3 | 0 | 1 | 13 |
| 49 | 《世》 | 5 | 0 | 7 | 0 | 0 | 12 |
| 50 | て | 8 | 1 | 2 | 0 | 0 | 11 |
| 50 | め | 4 | 3 | 4 | 0 | 0 | 11 |

**備考**　（1）仮名は，平仮名と同じ字母のものについては，平仮名を用いて示した
（2）平仮名と異なる字母のものについては，字母に当る漢字で示した
（3）漢字は，仮名の字母と区別するために《　》で囲んだ
（4）ハの異体仮名が行頭のために先行する文字がない場合は，先行する文字の代わりに「→」記号を用いた
（5）ハの異体仮名が行末のために後続する文字がない場合は，後続する文字の代わりに「←」記号を用いた

**参考文献**

石井文夫（1979）「「足利本仮名書き法華経」漢字字音一覧（1）」『宇都宮大学教育学部紀要　第1部』29，宇都宮大学教育学部，1979年12月
石井文夫（1980）「「足利本仮名書き法華経」漢字字音一覧（2）」『宇都宮大学教育学部紀要　第1部』30，宇都宮大学教育学部，1980年12月
石井文夫（1981）「「足利本仮名書き法華経」漢字字音一覧（3）完」『宇都宮大学教育学部紀要　第1部』31，宇都宮大学教育学部，1981年12月
石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（2010）『言語研究のための統計入門』，くろしお出版，2010年
柏谷直樹（1989）「「足利本仮名書き法華経」の表記と訓法の一特徴」『訓点語と訓点資料』82，訓点語学会，1989年10月
柏谷嘉弘（1988）「足利本仮名書き法華経の漢語「語彙表」」『岡山大学教養部紀要』24，岡山大学教養部，1988年2月
小松英雄（2003）『仮名文の構文原理』増補版，笠間書院，2003年（初版は1997年）
今野真二（2009）『文献日本語学』，港の人，2009年
野沢勝夫（2006）『「仮名書き法華経」研究序説』，勉誠出版，2006年
林　義雄（1977）「足利本仮名書き法華経の用字法について―『は』の仮名字母の検討―」『二松学舎大学論集』国文学編・創立百周年記念号，二松学舎大学，1977年10月
堀川宗一郎（2015）「鎌倉時代における仮名文書の「とん」―固定的連綿―」『日本語の研究』11-4，日本語学会，2015年10月
桝矢桂一（2007）「仮名書き文における連綿の意味」『大阪薬科大学紀要』1，大阪薬科大学，2007年
峰岸　明（1979）「足利本仮名書き法華経の漢字表記について―表記より文体に及ぶ―」『中田祝夫博士功績記念　国語学論集』，勉誠社，1979年2月
矢田　勉（2012）『国語文字・表記史の研究』，汲古書院，2012年（第3編第6章。初出は2006年）

本研究は，JSPS科研費　25370525の助成を受けたものです。